



No.89 2008. 1  
 (株)よかネット

NETWORK

地元農家が先生になる「糸島まるごと農学校」  
 —「農」を通じて都市と農村と九大をつなごう— ..... 2

故郷創世塾第一期に参加して ..... 4

シンポジウム報告 地産地消でまちづくり  
 —九州の台所、八女の食材を生かして— ..... 6

都市住宅学会九州支部シンポジウム  
 「すまい。まちづくりにおける民間力」 ..... 8

今年もやっています サイエンスキャラバン  
 —第4回と第5回の報告— ..... 10

見・聞・食

おおらかな神々が宿る高千穂町にて夜神楽を見る ..... 12

手づくりで、おいしく楽しく考える食農体験  
 —もくもく手づくりファームに行ってきました— ..... 13

失われる地域文化の保存・継承を考える —その3—  
 —八女丸林本家保存・活用への取り組み— ..... 16

どうする大牟田 —地域コミュニティの再生—  
 TOMネット大牟田フォーラム報告 ..... 17

近況

3年後に迫った九州新幹線全線開通に思う ..... 18

今年も正直に ..... 18

ネットテレビに出演中：木曜午後3時  
 「どこでもテレビ博多」(docodemotv.jp)の“人もうけ列伝” ..... 19

糸島の焼きガキを眺めながら ..... 20

地元の人による地元の人のお祭り  
 佐世保きらきらチャリティ大パーティ ..... 20

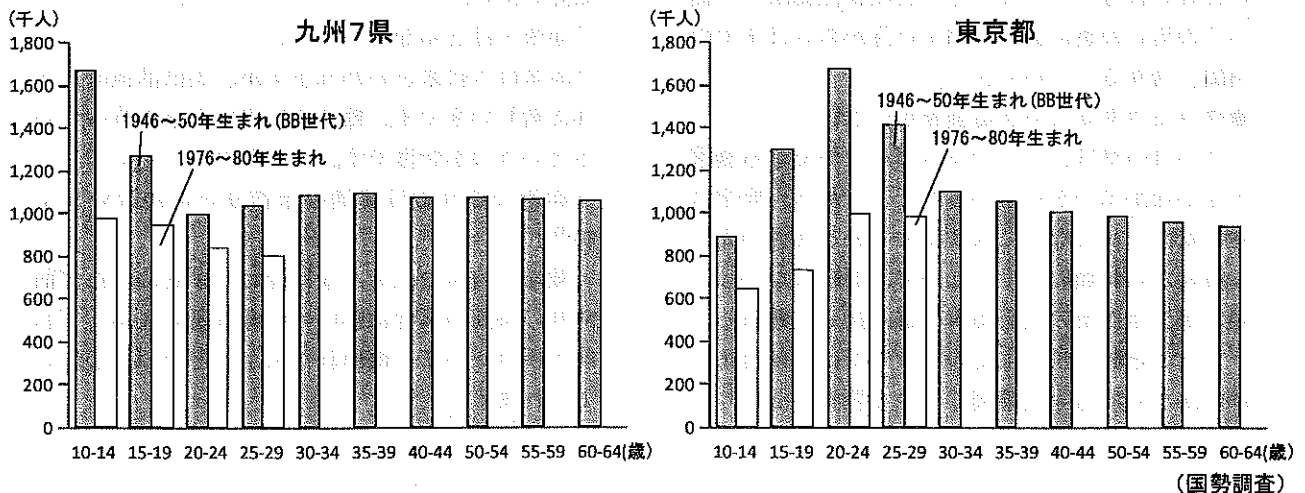
第2回飯山市シンポジウム  
 —観光地を磨くセンスアップの技術革新— ..... 21

今年もホークス応援のために頑張ります ..... 22

●九州から人口の流出が止まらない！？

当社には、1976~80年生まれが4人います。地元で働く友人が多いという話があったことから、「九州に同世代が戻って来ているのでは？」という話になり、人口の定着状況を親の世代であるベビーブーム世代（以下BB世代：1946~50年生まれ）と併せて、九州と東京都で比較してみました。

BB世代では、大学を卒業して就業する25~29歳の時期に東京都の人口が減り、九州の人口が増える動きが見られたものの、残念ながら私たちの世代では、依然東京都に人口が留まっており、九州の人口減少が続いているようです。



## 地元農家が先生になる「糸島まるごと農学校」

「農」を通じて都市と農村と九大をつなごう

本田 正明

「糸島まるごと農学校」のコンセプトが生まれたのは、約2年前のことである。九州大学が糸島地域に移ってきたにもかかわらず、なかなか地域と大学の連携につながらないと閉塞感が漂っていたところに、地域にある資源を活用した地域プロジェクトの1つとして生まれたものだ。

このプロジェクトの担当の二丈町は、大規模農業や減農薬農業、赤米などの古代米の再現など、国内でも先進的な取り組みが行われている。福岡都市圏の住民は安全で安心できる食への関心も高いので、地元の農家や九大の先生に講師になってもらい、都市住民や学生たちが糸島中をぐるぐるめぐりながら農について学ぶ場、ネットワーク型の農学校をつくることになった。今年度はプロジェクトの本格展開に向けて11月に「プレキャンパス」事業を開催した。事務局スタッフとしてお手伝いをしたので、その取り組みを紹介したい。

最初の壁は、場所の確保

農学校なので、座学の講座だけでなく、実習を取り入れようというのは最初からの方針だったが、なかなか農作業を行える場所が見つからない。最初は、耕作放棄地を活用しようと思っていたのだが、そういう農地は、アクセスが悪く駐車場が確保できない山間地がほとんどだ。

まるごと農学校の本来の主旨からいうと、果樹園などに足を運んでもらい、糸島の農業の現状もみてもらいたかったのだが、駐車場の確保や移動時間が長くなり過ぎるといった問題もあり、町の担当者が苦労して、ようやく農産物直売所の「福ふくの里」の裏にある農園を11月から6月までの期間、借りることができた。

クワでウネ立てできる農家がない

2つ目の壁は、クワでウネづくりができる農家がなかなか見つからなかったことである。座学は、食の安全・安心などに取り組んでいる九大の先生に最初からお願いしていたので、問題はなかったのだが、農作業の実習指導の講師探しに難航した。

まるごと農学校の生徒のイメージは、就農まではいかなくても家庭菜園ぐらいで農業と関わりた

い人たちや糸島での田舎暮らしに憧れる人たちである。農をもっと身近に感じてもらって、やってみたいと思ってもらうには、やっぱり耕耘機ではなく、クワを使ってほしい。

講師さがしを始めてからようやく気づいたのだが、大規模な農業が盛んということは、労働集約のために機械化がものすごく進んでいて、クワなんて使う人がいないということである。最初は若い人を探していたのだが、いろいろな人から「機械化が進む前の70歳以上でないと、クワでウネ立てできんばい」といわれてしまった。また一口に野菜農家といっても、ナスやブロッコリーなどに特化している人が多いので、野菜づくり全般に話せる人も少ない。農業普及センターやJA、直売所、地元の農家などをヒアリングしてまわりながら、ようやく講師になってもらえる人を見つけたときにはほっとした。

種苗代や参加者の弁当代、場所の借り上げ費用など最低限の必要な費用から、会費は3,000円とちょっと高めの設定だったにも関わらず、福岡市近郊からや宗像市などから50件を超える申し込みをいただいた。

座学では、農業や農家の実情を聞く

午前中は、「糸島発！ 農業最前線！！」と題して、九州大学農学部佐藤剛史先生と地元の赤米生産農家である吉住公洋さんに糸島の農業の現状と食の安全などについて話していただき、参加者との意見交換を行ったので、その内容を簡単に紹介したい。

「赤米とはどんな米ですか」

「赤米は古代米といわれますが、実は品種改良された新しい米です。糠の所に赤い色素を持っているというのが特徴です。お赤飯のルーツです」

「赤米の作り方は普通の米作りと何か違いますか？」

「栽培そのものはそんなに変わりません。ただ稲刈りの時期が異常に遅いので隣近所の人、『お前の所コンバイン機壊れたんか』といつも心配してくれます」

「米作りで農薬はどのくらい使ってますか？」

「糸島地域は、実は減農薬地帯です。最初に種子消毒、種初消毒。それから、苗を作るときに人によってですが、若干病気と虫の消毒をします。田植えをした後は、平均的にはこの辺1回ですね。0回の人もあります。多いときで2回。これは、全国レベルで行くとかなり少ない地域です」

「昔は、何月頃何の農薬をかけなさいという稲作暦というのがあって、虫がいようがいまいが、病気が出ようが出まいが農薬をかけてました。それを宇根豊さんという人が、自分の田んぼは自分で見ましようという運動を起こして、『虫がいらないだったらけなくていいじゃないか』という動きをしていった結果、糸島地域というのはすごく農薬が少なくなってます」

「専業で米をすると、どのくらいの規模が必要ですか？」

「学者の試算によりますと、22ヘクタールだそうです。100m×2200mです。それくらい作って、田植えを14.5町、転作で大豆を8・9町、裏作に麦を22町作ると、1人あたりの所得が400万ぐらいで、何とかかなかなというところです」

「吉住さんはどうして、直売を行うようになったんですか？」

「ミカンに使う着色増進剤というのがありますが、それをかけると店先では色が濃くなるので高く売れます。消費者は薬がかかっているから高いとは思っていません。農家も真冬にかけたくもない臭い薬を頭からかぶってかけてるんです。薬をかけたくない農家と薬がかかっていない方がいいと思っている消費者とが繋がらない。流通を挟むと農薬を使ったから綺麗なんだという情報が全然伝わらない。なるべく食べる人と作る人の情報が繋がるのが一番だと思ったからです」

また、佐藤先生が会場の参加者に、外国産の安いお米（100円/kg）と有機のお米（300円/kg）、日本産の農薬を使った安いお米（400円/kg）と無農薬のお米（700円/kg）の4つでどれを選ぶかを聞いたところ、農薬などへの関心が高いにもかかわらず、経済的な事情もあり、農薬を使った日本産のお米を選ぶ人が半数以上いたのには驚いた。安全で安心できるものを食べたいと思いながら、経済的なことを考えると農薬がかかっているにもかかわらず仕方ないといった複雑な消費者心理が反映しているようである。農薬の体内蓄積など将来的な危険性を気にしている参加者もいたが、吉住さんが



米選びについて会場の意見を聞く佐藤先生



赤米農家の吉住公洋さん

「百姓が死なない限り大丈夫です」との言葉には、思わず納得してうなづく人が多かった。

実習では、先生が質問攻めにあう

午後は、畑に出たの農作業実習だ。午前中には参加者同士の意見交換の時間があり、お弁当も一緒に食べたので、仲良くなって電話番号の交換をしている人もいた。講師には野菜農家で直売所に出荷をしている山崎七郎さんに先生になってもらった。山崎先生を紹介すると「国民学校しかでたらんから、とても先生ではないです」と照れていたが、若いときは7反ぐらいを一人で耕していたというクワ裁きには参加者がみな驚いていた。ただ、クワの使い方は経験を積むしかないようで、説明はしづらそうだった。参加者はどんなクワを準備したらいいのかというところから知りたかったようで、家庭菜園程度で使用頻度が少ないなら錆びないステンレスのクワがいいとか、平クワが汎用性があるといいなど、アドバイスをもらうと熱心にメモをとっていた。

畑での主な質問と意見は以下の通り。

「どうしてウネづくりをするんですかね？」

「やっぱり、排水や水はけを良くするためよ」

「肥料などは使うのですか？」



野菜づくり実習の講師、山崎七郎さん



参加者全員でマルチ張りを体験

「今回は、マルチも張るし、栽培期間が短いのでほとんどいらんよ。油カスとかの肥料は、遅効性（効果が出るのが遅い）やけんね。今回のタマネギは極早生<sup>ごくわせい</sup>やから、効果が間に合わんよ」

「マルチってなんのために張るんですか？」

「一番の理由は、草が生えんことやろうね。それと保温効果があることと、雨で肥料が流れたさんこともあるかな。それとマルチを張ると作物が育つのが早くなるね。」

「早生<sup>わせい</sup>ってどういう意味なんでしょうか？」

「早生は収穫時期が早い品種のことばい。最近じゃ、超極早生<sup>ちやうごくわせい</sup>って品種もあって、それだとタマネギが3月に収穫できるんよ」

「病害虫の対策は？」

「やっぱり2回ほど薬をかけないかんやろうね。夏が暑いと冬に虫が多くなるね。それと春に湿度が高い日が続くと病気になるやすいね。昔は、病気になるってから効く薬があったけど、今の薬はほとんど予防用やね」

「野菜ができなくなったんですけど、原因は？」

「連作障害<sup>れんさくしょうがい</sup>といって、毎年、同じところに同じ野菜を植えると、収量が毎年1割つづつ減っていくね。2年目ぐらいまではわからんけど、3年目にはかなり減るよ。」

「トマトが連作に一番弱いね。意外と気づかないんだけど、ナスも馬鈴薯もトマトも同じナス科の仲間だから、馬鈴薯を植えたところにトマトを植えてもダメだよ」

農を通じたつきあいを広げたい

今回の実習は、農園が11月から6月までの期間しか借りれないこともあり、たまねぎとじゃがいもしか植えられなかったのだが、参加者は家庭菜園などで野菜づくりをしている人が多く、農作業も熱心だった。先生も「わからんときは電話してください」と電話番号まで教えていた。また、農業の実情を学ぼうと九大の学生グループが、事務局のスタッフとして手伝ってくれたのは非常にありがたかった。農を通じて、これまでなかった都市と農村や九大とのつきあいができ始めたように思う。6月には収穫祭を行うが、その後の予定はまだこれからである。将来は、糸島に住む人が増えたり、農業を始める人が出てきてくれるように地道な取り組みを進めていきたいと思っている。

（ほんだ まさあき）

### 故郷創世塾第一期に参加して

雪丸 久徳

「やねだん」こと柳谷集落（鹿児島県鹿屋市。詳しくは、よかネット88号参照）にて、地域づくりのリーダーを養成する塾「故郷創世塾 - 第一期」（11月24日～27日の3泊4日）が開講した。

行政に頼らない地域づくりのモデルとして全国から注目されている「やねだん」のリーダーである豊重哲朗さんと4日間共に過ごし、そこから地域づくりのリーダーに必要な何かを学びとるといふものだ。

塾長のサポート役、講師としては、NHKアナウンサー（今は番組デスク）の森吉弘さんが年休を使って自費参加。森さんは全国を巡回する番組「ここはふるさと旅するラジオ」を担当し、地域で生きる「元気人」の故郷への思い、苦勞、取り組みなどを紹介したり、一方では、趣味として、全国で若者の教学道場「森ゼミ」をボランティアで開催し、「社会の歩き方」を共に考え学んでおられる超元気人だ。

今回の創世塾（第一期）は、鹿児島県内の行政職員を対象に参加募集が行われたが、私も鹿児島県（根占）出身ということで加えて頂いた。

一期生の仲間は、以下のような顔ぶれであった。年齢は、20代～50代までの幅広くいる。私が下から2番目であった。

児玉憲一氏、濱屋政博氏（志布志市）  
堀昌伸氏、宗像完治氏（出水市）  
大田雄二氏（大隅地域振興局）  
梶原宏行氏（鹿屋市）  
木場一昭氏（錦江町） + 私

「地獄体験」による自己紹介

当日、やねだんに着くと大型バス2台、約70名の視察団がちょうど帰るところで、慌ただし中で開塾式が始まった。会場の公民館には、集落の長老たちが20名ほど集まっており、最近では体験したことがないほどの緊張した空気が漂っていた。その中で、塾長、講師、集落の長老など代表者のあいさつがあり、それに続いて塾生一人一人がこれまでに体験した一番辛かったこと、言わば「地獄体験」をさらけ出す独特の自己紹介をした。経験の浅い私は何を喋ったらいいか困ってしまったが、涙ながらに体験談を語る人もいた。そのおかげで塾生同士の距離が一気に縮まった気がした。

焼酎なしの夜なべ談義

開塾式の後は、集落内にある空き家を改修してつくった迎賓館（今は国内からアーティストたちが移住してきて住んでいる）を一通り見てまわって気になった点などの取材をした。3m以内をよく見る、とのキーワードが研修の期間中によく出てきたが、そうやって集落を見て歩くと普段見気づかない、見過ごしていた物事が面白く思えた。

その後、近くの温泉に入り、集落が運営する食堂で夕食をとった後に、取材した内容の発表や意見交換、今回の研修にかける意気込み、聞き手として如何に相手から話を引き出すかなど、熱い談義が行われた。豊重さんのリーダーとしての使命感の強さを肌身で感じるとともに、自分の不甲斐なさを痛感した夜であった。

宿舎（空き家を改修した迎賓館）に戻ってからも、大好きな焼酎はほとんど口にせず、豊重さん、森さんを囲んで談義が続き、結局寝たのは午前2時をまわっていた。

2日目は、集落の長老お二方に取材をさせて頂いた。池田昌三さん（85歳）は、衛生兵で習得した医学や薬学などの知識を生かして、養豚業、養鰻業に着手された方である。養豚業に成功しながらも、何の商売にも浮き沈みがあると養豚の将来性を睨みながら、当時まだ誰もやったことのなか



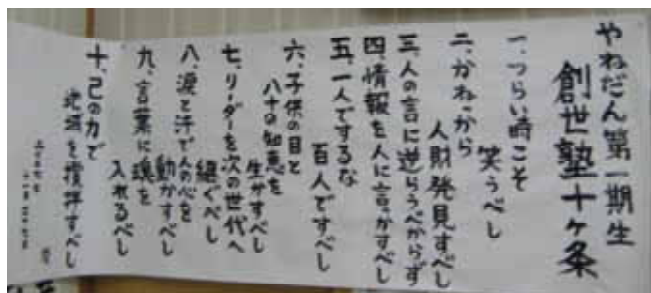
池田昌三さんを囲んで

った養鰻業にチャレンジされ、地域の産業として根付かせた先駆者である。始めるに当たっては相当数の洋書も読まれ、そうして得た知識・知恵は、隠すことなく皆に教えてきたそうだ。「人にいっかすんな（おしえるな）」はこの辺（鹿児島）の人の悪い癖。勉強したこと（知識や技術）はみんなにいっかせんといかん。」「やる前から、やっせん（だめだ）と言うな！やっせさせる方法を真に迫って考えよ」とおっしゃっていたのが印象的だった。

2人目の福ヶ崎春香さん（93歳）は、柳谷の最高齢者。この方の話は本島に凄まじかった。度肝を抜かれた。

海軍時代、航海中に魚雷を打ち込まれ、船がこっぴみじんとなり、気づいたら海の中で木ぎれにつかまっていて、油に火がついて燃える海が海流とともに近づいてくる中、流れと逆方向に泳ぎ、17時間漂流した後にやっとの思いで見方の船を見つけ、相手に気づいてもらうためにふんどしを振り回したが気づいてもらえず、最後は死にものぐるいで船まで泳ぎ、手をさし出した。その瞬間に気絶し、1ヶ月たってやっと元気になったという。映画のワンシーンのような話である。当時の写真、それから、身につけていたチンタオの1円50千硬貨で作ったのメダルをポケットから取り出して、皆に見せてくれた。小さなメダルであったがその背景に凄く重みを感じた。私自身戦争の話は避けてきたが、しっかり聞いて、子や孫にも語り継がないといけない大事なことだと改めて反省させられた。

その夜は、お二方を取材してみたの意見交換が行われた。その夜豊重さんは「高齢者は図書館だ」とおっしゃったがまさにその通りだと思った。現場を知るといことは、地域にあるモノやコト



創世塾十ヶ条

に目がいきがちだが、いろんな経験をされた宝のような高齢者たちがいるということにももっと目を向けることが大事だということを感じさせた。

また、豊重さんよりリーダーは「かねて(=予て)」が大事だという話があった。予告、予想、予言、予定と使われるように、前もっての準備が大事だということだ。「相手の予てを見て、如何にして相手の出番を作ってあげるかが鍵で、だからこそ日頃の積み重ねが大事になるとのことだ。「地域の人と確実なつきあいを予てからしないと身を滅ぼす、一本釣り感覚ではだめで、そんなことをしては竿ごと引き込まれ身を滅ぼす」とおっしゃっていた。また、出る杭は打たれるが、リーダーも同じで、並のリーダーならすぐに打たれてしまうから、普通のリーダーよりもさらに抜け出る、逆に出ない釘は捨てると言われた。2日目の夜も遅くまで談義が続き、気づけば2時であった。

3日目は、中尾ミエさん(83歳)の取材が始まった。夫を早くに亡くして苦労をされた話しや、80歳過ぎてからの大手術の決断などの話をされた。今の人生はおまけだと笑っておっしゃっていたが、手術をした時こそ、子供のありがたさを感じたことはない心底感謝しているようだった。子供は愛情をかけてちゃんと育てなさい、きっといいことがあるからね、というやさしい表情で話すおばあちゃんだった。やねだんから外には出たくない、やねだんが大好きということがよく伝わってきた。

その後、指宿市から来た認定農業者の視察団とともに土着菌づくりの講習に参加した。もともと豚の糞尿の悪臭問題の解決のために始まった土着菌づくりだが、地域総出で手作りの土着菌センターを作り、今ではそこが地域の自主財源(土着菌そのものの販売、土着菌で栽培したサツマイモでつくる焼酎の販売等)を生み出す要となっている。早朝に米糠を取りに行く係、毎朝攪拌する係がいて、そういう影の努力者がいるからこそ今のやね

だんがあるのだということを思い知った。午後からは、塾生のPB(プライベートブランド、セールスポイント)のプレゼンテーションがあった。持ち時間は2分。会場には、県職員や市町村から来賓が20名ほど来ており、プレッシャーも最高潮に達した。最後に発表したのが、緊張のあまり魅力的なプレゼンとはほど遠い内容だった。自分の売りをわかりやすく相手に伝えるのは本当に難しいことだと痛感した。プレゼン力を高めるポイントとして、森さんから以下のようなポイントを教わった。

- ・言霊が一番大事。(しっかり準備をして、よし、しゃべるぞという覚悟)
- ・数詞・固有名詞で具体的に話す。(抽象的な表現は避ける)
- ・モノを使おう(相手への伝わり方は、ボディランゲージ55%、口調(緩急大小強弱)38%、内容7%)
- ・結論は先に言おう
- ・一文は短く(ワンセンテンスワンフレーズ)

以上、私が参加したのはここまでで、3日目の夕方に福岡に帰ることになった。これまでにない充実した研修だったので、最後まで居たい気持ちで別れが相当名残惜しかった。

数日後、創世塾一期生のメーリングリストが立ち上がり、ネット上での情報交換が頻繁に行われている。その後の話しを聞くと、最終日にこの4日間を通して感銘を受けた言葉を挙げ、人間性、行動力、理念、決め文句を協議してきめたとのことだ。10箇条は写真の通り。心のこもった10箇条ができたと思う。今後ともこの3日間で学んだことを胸に刻み、塾生とのこの縁を大事にしたい。(ゆきまる ひさのり)

シンポジウム報告

地産地消でまちづくり

九州の台所、

八女の食材を生かして

愛甲 美帆

12月上旬、八女市地産地消拡大促進協議会が主催するシンポジウムが開催された。これは、内閣府より認定を受けた地域再生計画に基づく地域提案型雇用創造促進事業(パッケージ事業)のひとつであり、当社は事務局のお手伝いをさせていただ

いている。当日は、八女市内、近隣町村から農業に従事する人を中心に参加され、用意された200席が埋め尽くされる盛況となった。

#### 場面を考えた商品と仕組みづくりが大事

基調講演では、「儲かる仕掛け」の作り方～大事なことは地域が笑顔になること～と題して徳島県上勝町(株)いどり代表取締役横石知二さんの講演が行われた。高齢者を担い手として葉っぱを料理の「つま」として売るビジネスを展開し、月収100万円を超える高所得者を次々と生み出されている方だ。人口2000人、徳島県で最も人口が少ない村で、農協の売り上げ高2億6千万円だという。このような経験から横石さんは以下のようなことをお話された。

- ・上勝町にはIターン、Uターン者が多いが、生活ができる仕組みがあるから帰ってくる。
- ・人間にとって必要とされること、出番があることが大事。上勝町では70～80歳代の人が現役で働いており、インターネットやFAXを使って注文を受けている。
- ・商品は、売れて初めて商品と呼べる。商品は、使われる場面を考えてつくることが大事。そのためにはどのような使われ方をしているか現場を見る必要がある。
- ・情報発信が大事。内に3割、外に7割で自信と誇りを伝える情報を出すと商品に価値が付く。
- ・農業の生産をしてもいくらになるかわからない、見えないという状況が問題。上勝町では当初防災無線を活用した通信網で、欲しい商品をすぐに発注でき、欲しい時間までに集められるという仕組みを作った。その後高齢者でも使えるマウスを開発し、現在光ファイバー通信により発注をしている。また、パソコンの導入により直売所での時間帯毎の個人の売り上げを確認できたり、月ごとに売り上げの上位が発表されるなど、自分の仕事の成果が見える仕組みがある。
- ・1979年当時、まちの人は補助金が欲しい、農業は儲からない産業だと愚痴をこぼし、子ども達に勉強しなかったらここに残ることになるぞと言っていた。この商品や仕組みを作ったことで、「なにやったってあかん」という状態から「今の状況から自分はどうすればいいか」と、自分の事として考えられるようになった。思いや誇りができると住んでいる地域が光ってみえる。食材豊富な八女。これからどう取り組むか。基調講演に続くシンポジウムでは「食を生かし

たまちづくり、人づくり」をテーマに農水産加工品開発指導アドバイザーの尾崎正利氏にコーディネーターをお願いし、道の駅たちばなフードアドバイザー樋口愛子氏、料理研究家であり、檜山塾塾長の檜山タミ氏、博多全日空ホテル飲料部長中尾正治氏、八女市長野田国義氏と食をとりまく各立場の方から現在の取り組みと食材を生かす知恵、人材の育成、ビジネスづくりなどについて意見を出していただいた。

#### 【樋口愛子氏】

- ・旬の野菜はおいしく、体も元気になる。道の駅では、本当は甘いのだが酸っぱそうに見える青いミカンについて、お客さんに「ビタミンCが多く疲労回復になりますよ」と声をかけると売れるということがある。
- ・売り場では、ある野菜はたくさんあり、ない野菜はまったくないという状況がある。商品がなくなると、生産者に電話して持ってきてもらうこともあるが、例えばインターネット上で店舗の商品の量を把握でき、直売所にたくさんあって、他の店にはなければ、あるところから持って行くというような取り組みができたらと感じた。

#### 【檜山タミ氏】

- ・新鮮というのが一番おいしい。新鮮であれば塩だけでよく、調味料はいらない。都会の人はどういうものがおいしいか、野菜づくりの大変さを知らず、自分で洗わないでいいような商品を求める。
- ・塾では、野菜の状態に応じた食べ方を教えているが、野菜づくりをされている方から皆さんに「こうしたらおいしいよ」と詳しい食べ方などを伝えていただきたい。

#### 【中尾正治氏】

- ・当ホテルの公開空地を活用して旧上陽町の特産品をPRしていただいた縁で、旧上陽町の頃からおつきあいをしている。煎茶を使った菓子を開発したところ、好評でホテル内で販売している。また、ロビーで上陽茶の手揉み実演を行ったり、主婦やOLにお茶の入れ方講習会などを開催している。
- ・ホテル業界は新しい食材、いい食材を探しており、できれば「町のさんの野菜です」とお客様に提供したいと考えている。お客様も安心でおいしいものが食べたいと言われる。
- ・食材を仕入れる場合、安定した供給が必要だが、

生産者をお願いするばかりでなく、信頼関係をつくっていき、お互いが利益を生むことが必要だと思う。

【野田国義氏】

- ・市役所の自販機にJAの八女茶の商品を置くようになるまで、自動販売機業者との調整が大変だった。学校給食についても地産地消でまかないたいが、品揃えや量の関係、また関係機関との調整などでできないシステムになっている。
- ・お客さんが求める農産物の品目・品質に対応するためにどうしたら良いのかと話をしているが、生産者や販売者のネットワークを広げて連携していくことが必要だと感じた。

【横石知二氏】

- ・八女のように都市圏に近く、食材が豊富にそろった地域はなかなかない。消費者と産地をどう近づけていくか。市場向けだけでなく、直売所や給食などに対応できるしかけをしっかりと作っていくことが大事だ。

勢いのある基調講演の後、各立場から現状をふまえて、これからどう取り組んでいこうかという思いあふれる意見に会場からときおり拍手や笑いかわきおこっていた。

各立場の方と生産者の方が一同に介し、知らなかったけど実は同じ思いをもっていたということがわかって共感し、そのような雰囲気になったのだと思う。

横石さんの言われた「変わらないリスクと変わるリスクどっちが大事か」という問いかけに、「思い」だけでなく『仕組み』づくりにチャレンジする意識と取り組みを肝に命じたあつという間のシンポジウムであった。（あいこう みほ）

都市住宅学会九州支部シンポジウム報告

「すまい。まちづくり  
における民間力」

山田 龍雄

都市住宅学会は、「建築学、住居学、都市計画、法学、経済学などの総合学としての都市住宅学を構築していくことを目的(設立趣旨抜粋)」として1992年に設立されたものであり、九州支部は本部設立から11年後の2003年7月に発足している。九州支部では、事業活動の一環として毎年1～2回、会員及び住宅関連の仕事に携わっている方々に向

けてシンポジウムを開催している。

今年は「すまい・まちづくりにおける民間力」というテーマで、11月17日(土曜)に九州大学西新プラザで開催した。

事例報告のテーマと報告者

- 1.新しいハウジングの計画と供給  
ibb-fukuoka projectと子育て支援マンション  
廣田 稔(廣田商事(株)代表取締役)  
コーポラティブハウジング  
大澤 慎一(株)都市デザインシステム福岡  
オフィスゼネラルマネージャー)
- 2.協働のまちづくり  
熊本城下町きゃあめぐる  
富士川 一裕(株)人間都市研究所代表取締役)  
延岡市「ココレッタ延岡」  
田中 一樹(株)太陽設計 代表取締役)  
坂口 敬司(株)電通九州2011室/九州大学  
USI客員教授)

今回は、上記に示すように実際に民間で新たなコミュニティづくりを意識した住まい提案を事業化している企業、あるいは行政・住民・コンサルとの協働でのまちづくりを進めている事例を報告していただいた。私も今年度から常議委員をしている関係で、ある事例報告のコメンテーターとしてシンポジウムのお手伝いをさせていただいた。

今回の事例報告は、事業化したプロジェクトであり、事例毎に現場での問題点や今後の課題を聞くことができ、非常に内容の濃いものであった。また、会場からの質問も多く、予定終了時間を30～40分以上延長した。

ここでは紙面の関係上、各事例報告の詳しい内容は掲載できないが、主要な事業プロジェクトの概要及び主な意見交換の内容を紹介させていただく。

地域への定着化を目指す子育てマンション

廣田商事は、元々漁業関係の物販商社であったのが、不動産事業に進出したとのこと。新たな賃貸ビルの商品として、まず2000年に天神の事務所ビルを改装し、小規模な床面積しか必要ないベンチャー企業向けの事務所「ibb-fukuokaビル」をオープンし、さらに2007年には姪浜にベンチャー企業向けの事務所ビルと賃貸マンションを合体させた賃貸ビル(名称:ibb will姪浜)をオープンしている。2007年の11月中旬時点で66戸のうち約13の企業が3～4階を中心に入居している。また、「ibb will姪浜」では、事務所部分の管理運営を



福岡県S O H O事業協同組合に委託している。さらに、廣田商事の新たなチャレンジとして、2007年3月に福岡市南区長浜に「子育て支援マンション」をオープンしている。（詳細はよかネット87号に掲載）

マンションといっても賃貸マンション（27戸）であり、1階に無認可保育園（定員20名）を併設し、運営主体を（有）キッズプランニングに委託している。オープンして1年未満であること、あまり積極的な宣伝をしていないといったことで、保育園への入居者は、まだ5名とのこと。廣田さんは「今後、徐々に地域のお母さん方へ知れ渡り、地域に定着していくことができるとよい」と言われていた。

（主な質問と回答）

Q：保育料はマンション入居者と外部の人とは差があるのか。

A：入居者の方が2割程度安くしている。

Q：賃貸マンションなので、入居者の定着は、あまり期待できないのではないかと。このような意味でコミュニティづくりということではどのように考えているのか。

A：賃貸マンションであっても、できるだけ地域に留まっていたきたいと思っている。

街区中央部に大きな里山を共有する戸建てコーポラティブの取り組み

㈱都市デザインシステムは、東京を拠点にコーポラティブハウスを事業化してきた会社であり、数年前から福岡市に進出し、コーポラティブハウスを事業化してきている。福岡市内での1号は、西新の九電跡地に建てられた分譲マンション型のコーポラティブハウス（17戸）である。

私が話の中で一番感心したのは、参加者を募集し、2ヶ月間で参加者の意志決定を図り、建設組合を結成し、20ヶ月程度で完成させてしまうというスピーディーさである。これくらいの早く意志決定させないとビジネスとしてはペイしないのであろう。また、会社としては建設組合とコーディネーター料だけの契約なので、一定の事業費の物件でないと採算が厳しいと話をされていた。現在、この会社では、北九州市で街区（1.2ha）の中央部に里山を有する戸建てコーポラティブの事業化を進めている。

ゼネラルマネージャーである大澤さんの話では「九州は地価が安い分、戸建てタイプのコーポラティブの方がやりやすい」と言われていた。これ

は、たぶんまとまった用地が入手しやすいこと、1戸当たりの事業費も抑えられることからマーケットも広がるのではないかと考えた。来年度には10戸程度のモデル住宅を建設し、公開するという事なので非常に楽しみである。

（主な質問と回答）

Q：戸建てコーポラティブの中央部に位置する里山の権利関係はどうしていくのか、どのように管理しているのか。

A：これから共有持ち分とするのか、個別の分割所有とするのかを検討していきたい。植栽等の管理については、これから入居者と話し合っただけで決めていくこととなる。

Q：2ヶ月という短期間で、なぜ参加者の意志決定を促すことができるのか。その秘訣は何なのか。

A：これまでコーポラティブ住宅を実践してきた実績があることの安心感と、まず土地があること、事業スキームと個人の負担となる事業費を提示することが意志決定を早くさせることのポイントである

人的ネットワークをつくりながらまちづくを進める  
～熊本市城下町「きゃあめぐろ」

富士川さんには、熊本市で震災にあわず、昔の城下町の佇まいを残している古町、新町での地元と一緒にいるまちづくりの取り組みを報告していただいた。

当初、城下町内にある歴史的な建築物の保存活動から始まり、徐々に地元の熱心なまちづくり活動の人々となつたり、これまで、ほとんどボランティアで係わってきたそうだ。富士川さんの足かけ何十年かの活動の積み重ねにより、地元から十分頼りにされる存在になっているように感じられた。最近、やっと市から城下町の活性化のためのサポート費が出るようになったとのこと。「きゃあめぐろ」とは、熊本弁で「さあ、めぐりましょう」という意味らしく、城下町では立ち寄りどころを示したガイドマップを配り、散策できる仕掛けを行っている。

また、河原町プロジェクトの話は非常に興味深いものであった。河原町の一角に空き店舗が連なっている通りがあった。なんとかこのシャッター通りを再生できないものかと思い、地元商店街の方々との飲み会を企画したところ、若者の方から「この空き店舗を活用して商売を始めたい」との声があがり、地元の方で地権者交渉を行



第2部のコメンテーターと報告者によるディスカッションの様子

って、若者の店舗入店が実現した。平成15年3月に1号店がオープンし、徐々に若い人が入店し、今では20数件が商売を始めているとのことであった。富士川さんの話の中で一貫して主張されていたのは、やはり、「人のつながりからまちづくりがはじまる」ということであった。

(質問)

Q：城下町という魅力ある街並み、活動の仕掛けも面白いものがあり、新幹線整備と併せてもっと観光客が増えてくる。観光客が増えたと、どうしても地元に関係のないおみやげを売るような変なお店がでてくるのが懸念される。この辺のことはどのように考えているのか。

A：よく聞かれる質問であるが、地元の方は観光地にしようという意識はなく、まず生活を重視したまちづくりを考えている。

これからの展開が期待される「ココレッタ延岡」

「ココレッタ延岡」とは、JR延岡駅前の地元百貨店跡地に開発された商業ビルのことであり、日本語の個々(ココ)とイタリア語のレッタ(re tta：日本語で直線という意味)を組み合わせた造語である。

この商業ビルの開発の際には、事業主(株ティナプリ)とのつながりで(株)電通九州が総合プロデュースを受け、これに設計事務所(株)太陽設計)、九州大学USI(ユーザーサイエンス機構)とがスクラムを組んだプロジェクトである。昨年の4月にオープンし、まだ1年を経過していない。また、延岡市の中心市街地活性化事業のメイン・プロジェクトとして国の支援も受けている。

この商業ビルのコンセプトは「中高年女性をコア・ターゲットとしたスタイリッシュ(stylish)とカーム(calm：落ち着き)」ということらしいが、わかりやすくいうと「中高年女性がおしゃれをし、落ち着いた空間で癒し、憩う場づくり」と

いったことではないかと思う。このコンセプトづくりには、九大USIが中心となって市民アンケートを行い、延岡市の中高年女性が求めているニーズを探ったとのことであった。

「ココレッタ延岡」は延べ床面積約3,900㎡の3階建ての建物であり、店舗12件、行政施設2件(コミュニティセンター、子育て交流広場)が入っている。

私はコメンテーターとしての役割があったので、事前に送られてきたプロモーション用のDVDを見たが、事業の概要や空間のスケール感がよくわからなかった。シンポジウムがある1週間前に現地視察をした。現地に行き感じたのは、この「ココレッタ延岡」だけでは、コンセプトを生かした商業集積が不足しているように感じた。これから「ココレッタ延岡」を核として、既存商店街の再生を含めたまちづくりが進められることを期待したい。

(主な質問と回答)

Q：駅前という立地条件を考えた場合に、住宅を入れるということは考えられなかったのか。

A：当初から事業主の意向があった開発であったこと、事業費も限られていたため、住宅の導入は考えなかった。

今回、参加者が各報告者の関係者、大学関係者が大半を占めており、民間からの参加者が少なかった。次回のシンポジウム開催にあたっては、もっと民間への働きかけをしていき、都市住宅学会の会員増につなげていく必要があると思った次第である。

(やまだ たつお)

今年もやっています

サイエンスキャラバン

第4回と第5回の報告

本田 正明

昨年度、九州大学と糸島地域のつながりをつくらうと、大学の先生に研究を紹介してもらいながら、参加者とディスカッションを行うサイエンスキャラバンを始めた。

「農を活かす科学とは？」という地元の関心の高いテーマで実施したおかげか、毎回100人近くの参加があり、とても好評だったので、今年度も引き続き実施している。よかネット84号で紹介して以来、経過の報告をさぼっていたのだが、過去



今日は会場入り口でアンケートを実施



生ゴミを減量するためのダンボールコンポスト

の内容についてはインターネットで「いとキャラ」と検索してもらって配布資料や現場リポート（カラー写真つき）をみるできるのでこちらをご覧ください。

今年度の取り組みは、地域科学技術理解増進活動推進事業の「調査研究・モデル開発」に採択されたこともあって、大学側が非常に熱心に取り組んでくれている。キャラバンのテーマが「環境にやさしい科学とは？」となっているのも、移転してきた工学部をよく知ってもらいたいという思いがあるからだ。すでに前原市と志摩町でエネルギー問題とゴミ問題についてキャラバンを開催したのでその内容を紹介したい。

#### 水素技術と地中熱技術の話

9月14日に開催した前原市のキャラバンは、「九州大学の最先端研究を通じてエネルギー問題を考える」というちょっと堅苦しくて難しそうなタイトルだったが、100人を超える参加があった。参加者は50代から60代とみられる年配者が多かったのだが、小学生を連れた家族なども見られた。

まず、水素技術について佐々木先生に燃料電池のことや伊都キャンパスの水素ステーションでどのような研究をしているのかを紹介してもらった。普段なじみのないものだけに、エネルギーの発生の仕組みなどなかなかわかりづらかったのだが、水素自動車のモデルを用いた実演では、実際に車が動くまでの行程を子供達を中心に熱心に見入っていた。参加者からの質問では、「電気をつくるときに水が出るのなら、携帯電話やパソコンの燃料電池はさびたり壊れたりしないの?」といった素朴だけど気になる質問が出ておもしろかった。ちなみに水は出るけど、微量なので影響はないそうである。

続いて藤井先生に、年間の温度変化の少ない地

中熱とヒートポンプを活用した省エネルギー技術の研究について話をしてもらった。昨年度のキャラバンの飛び込みプレゼンで紹介したことがきっかけで、糸島に共同研究先が見つかり、その研究成果の報告もあったので、参加者の関心も高かった。胡蝶蘭を栽培しているハウスで省エネ技術の研究をしているということで、特に農家の参加者がコスト面などの質問を熱心に行っていた。後で聞いた話によると、キャラバン後に農業委員会のメンバーや農家などが何人も藤井先生の実験ハウスを見学しに行っているようで、「もしかすると本格的な地中熱利用が糸島で広まるかもしれない」と市の担当者は期待を膨らませていた。

#### 家庭から出るゴミと廃棄物処分場とゴミの資源化の話

11月29日に開催した志摩町のキャラバンは、「ゴミ問題から地域活性化を考える」ということで、ゴミを出すところから、その中間処理、資源化までゴミ問題を川上から川下まで考えようと初めて3人のスピーカーによるキャラバンを行った。参加者は80人ほどだった。

近藤先生には家庭ゴミを通じた市民行動についての話をしてもらったのだが、「日本人は環境に対する意識はドイツよりも高いのに、実際に活動するという環境行動は劣っている」という分析や「ゴミ袋の有料化も代替行為がなければ一時的な効果になる」といった話にうなずく人が多かった。

次に成岡先生には、家庭ゴミの処理過程や処分について、問題などについて話をしてもらった。このとき「溶融」という言葉を初めて知ったのだが、糸島クリーンセンターでは、ゴミを焼却するのではなく、高温で溶かして処理するのだそうだ。そうすることで残渣の発生が少なくなるのだが、処理できる量が限られるため、小規模自治体向けの施設だそうである。研究では、焼却灰をセメン

ト原料化することで、処分場の貯蔵スペースを再生できないかという研究をされているようだ。

最後の菅井先生は、秋田県の比内町で十和田石の廃材を活用した鶏舎の臭気緩和や防かびに使用するという研究を紹介してもらった。志摩町でもカキガラや竹を地域資源として地元の農業や畜産業に活用して地域内循環をできるようにしたいと抱負を語ると、参加者からは「鶏舎を紹介しませう」という人も出ていた。他にも「竹は竹炭にすると効果は高いが、加工するのにエネルギーや人手がかかりすぎるので生竹を活用できる技術開発をしてほしい」といった意見が出るなど、レベルの高い質問も多かった。

二丈町では「太陽と水」をテーマに2月に開催

事務局では当初、「工学のテーマは堅いし、難しそうなので参加者が少ないのでは？」と心配する声もあったが、昨年同様に参加者が集まり、質問も多かったことで関心の高さを知ることができた。先生方の分かり易いプレゼンテーションに支えられた面が大きかったと思う。大学の協力により、昨年以上に広報活動に取り組めたので、新しい参加者が増えていることも大きい。すぐには産業化や共同研究にはつながらないかもしれないが、少しづつ大学と糸島地域との間につきあいが増えているのが、事務局の励みとなっている。次回は二丈町で2月に「太陽と水」をテーマに行う予定なので、興味関心のある方はぜひご参加ください。

(ほんだ まさあき)

### おおらかな神々が宿る 高千穂町にて夜神楽を見る 山田 龍雄

縁あって高千穂町の秋元地区に伝わる夜神楽を見にいった。秋元には国常立命くにとこたちのみこと、国狭槌命くにさつみちのみこと、豊組淳命とよぐみぬしのみこと、立盤龍命たていわたつのみことの4つの神様を祀っている秋元神社という由緒ある神社がある。特に国常立命くにとこたちのみことと言えば日本書紀の最高神なのだそう。また、階段を登りきったところの鳥居が東北方向、真鬼門に向いているという珍しい神社である。

身分を証すことなく、ご馳走にありつく

私は、夜神楽のことについて何の前知識もなく、観光客のつもりで見に行ったのであるが、これが大きな勘違いの始まりであった。

秋元地区は高千穂野市街地から約40分程度南に

下った標高約570mの山奥にある。まず、秋元の飯干家(集落内には飯干姓が多いとのこと)の屋敷に夕方6時ごろ到着すると、すぐに大広間に案内された。そこでは既にテーブル一杯にご馳走が並べられ、縁ある人(宮崎大学の秋元地区調査の学生さん、秋元での田植えや脱穀ツアーのメンバー、女将さんの会のつながりメンバーなど多種、多彩なメンバーがいたようだ)たちが食事をしてきた。ここの主人らしい人が「まあ早く食べなさい。これから本番やから」と勧められた。身分も証すことなく、ただ言われるままに目の前のご馳走(大根、厚揚げ、椎茸等の煮付け、ゼンマイ、コンニャク、マス寿司、牛のたたき、唐揚げ、自家製豆腐など)を食べ、また、ビール、焼酎までいただいた。どれも味付けがよく、美味しかった。

観光客ではなく、神様と一緒に祝う儀式

食べ終わると、今年の神楽当番の屋敷まで車で連れて行ってもらった。秋元地区では大きな広間がある屋敷が4~5件ほどあり、毎年、これらの屋敷で順番に夜神楽が催されるらしい。

車から降りると、月明かりの夜空に笛や太鼓の音が響し、あたりは夜神楽一色の雰囲気包まれている。夜神楽を催している屋敷に入ると、既に第5幕の「杉登」の舞が始まっており、座敷の席は8割方埋まっていた。事前に用意していただいた御神酒を奉納し、指名を記帳した後、最初は外側で見ていた。まもなく、焼酎の一升瓶を抱えた地元の人が寄ってきて、茶碗を渡され、焼酎を一杯飲ませていただいた。

高千穂地方に伝承されている夜神楽は、古事記の天照大神(あまてらすおおみかみ)が天岩戸に隠れた折に岩戸の前で天細女命(あめのうずめのみこと)が調子よく、面白く舞ったのが始まりと伝えられ、古事記に沿った物語を33番の夜神楽で奉納するものであり、高千穂では11月末から2月まで19箇所で行われる。この日は夜の6時ごろから始まり、次の午前中まで夜を徹して踊り明かすのである。次の6幕目の「地固め」の踊り時には、座敷の隙間に座らせていただいた。この踊りが単調な笛や太鼓のリズムの中で、なんと1~1.5時間ぐらい催される。こちらは焼酎を飲んでいるし、横には灯油ストーブがあるし、寝るには絶好の環境が整っていたことから、神様の前でついウトウトと寝てしまった。

この長い踊りが終わると、既に夜中の10時を過ぎていた。ここで祭壇の前にテーブルが並べられ



翌朝の午前9時過ぎ頃、手力男命(てぢからのみこと)が岩の戸を取り払う所作を舞っている

はじめ、「直会」の儀式に入り、野菜の煮付けなどのご馳走が配られた。

私は、当然、食べ物や祭りの関係者だけに振る舞われるものと思っていたのであるが、この場にいる参加者全員へ配られたのには恐縮してしまった。このときに、この夜神楽は観光客と演じる人といった関係ではなく、ここの場所に来た人全員で神事をお祝いする祭りであり、我々も単に観光客ではなく仲間となっていることに気づいた次第である。なんと大らかな“もてなし”に感動してしまった。

明日の朝早く運転して帰る身なので、さすがに徹夜で見学するのは遠慮させていただき、11時過ぎに元の屋敷に戻り、寝床に入らせていただいた。

細女命の舞は地域で違っているのかも知れない  
翌日、8時前頃に起きて帰り支度を始めていると、屋敷の奥さんが「今ごろがクライマックスですよ。今、行かれたら良いですよ」と再度、神事への奉納を促された。“クライマックス”と言われたら、もう引き下がれない気分となり、また、同じ場所まで連れて行っていただいた。そこでは、25幕目の「手力男命：手力男命が天照大神の御岩屋を探り給う舞」を舞っていた。次が「細女命：面白き身振りが神楽の起源となる舞」である。細女命の舞は、セクシーな踊りであり、面白いとも聞いていたので、かなり期待していたのであるが、普通の舞と大きな変化がなかった。これは地域、集落によってアレンジが違っているのかも知れないと思った。

最後の雲下の舞が終了したのは午前11:00頃であった。あとは餅まきがあり、小袋一杯のお餅をいただきいた。昼も泊まった屋敷でご馳走になり、一路福岡への家路を急いだ次第である。

夜神楽の伝承のエネルギーはすごい

高千穂の人々が、この夜神楽を、江戸の中期頃から延々と伝承してきているエネルギーは何なのかを考えさせられずにはいられない。とにかく20数名の人が夜通し、舞の種類ごとに入れ替わりながら踊るということに、ただただ敬服してしまう。また、このような伝統ある文化、儀式を守っている人々が輝いて見える。

これからも夜神楽を守っていくためには、現実的には若い人が地域に定着、あるいは都会から帰ってきて暮らしていけるような仕事場が必要であると思った。そこで、ひとつの提案であるが、このような由緒ある文化・伝統行事を継承する若者には、役場や商工会、観光協会などへの優先就職を斡旋(当然、最低限の一次試験はあることを前提)しても良いように思うのであるが、どうであろうか。(やまだ たつお)

手づくりで、  
おいしく楽しく考える食農体験  
もくもく手づくりファーム  
に行ってきました  
愛甲 美帆

9月末、三重県伊賀市にある年商約38億円(2006年)、年間50万人が訪れ、その7割がリピーターという「伊賀の里モクモク手づくりファーム」に行ってきた。ここは、1988年に伊賀豚を原料にした養豚農家19名を中心に「手づくりハム工房モクモク」を設立して以来、ハム・ソーセージに加え、手づくり農産加工品などの販売、食や農業の体験を行っている。2008年に20周年を迎えるそうだ。6年前当社の先輩が社長理事の木村さんにお話を伺い、これまでの経緯や事業を「よかネット」49号で紹介させていただいたが、その後も挑戦は続き、農場レストランの展開、直売所、滞在型食農学習施設、ジャージー牧場、チーズ工房、貸し農園“農学舎”の設立と事業を展開されている。

#### モクモクの事業

ファーム内には、以下のような施設がある。

- ・ウィナー、焼豚、地ビール、パン、お菓子などの加工品を作る工房。
- ・食事処としてバイキングレストラン、そばと季節の野菜農村料理店、バーベキューハウス、ジュースやソフトクリームなどを販売するカフェ。



秋の自然体験ラリー においゾーンの様子



ウィンナーづくり。腸に肉を詰めていく



教室にあった説明用の教材

- ・ ウィンナーづくりやパンづくり、季節限定特別手づくり教室が体験できる体験館。
- ・ きのご農園、いちご農場、牛、ヤギなど家畜のことが学べるのんびり学習牧場、ジャージー牧場。
- ・ モクモクファームの商品販売店、モクモクや地元契約農家が生産した野菜や花の直売所、豚グッズ販売店。
- ・ 温泉、ハンモックの森。
- ・ 宿泊コテージ

その他、有機野菜や有機米などの生産。直販事業、直営農場レストラン、県内他地区での直営直

売所事業などがある。

#### これまでの経緯

元々木村さんはJAの職員で、品質で他産地に負けない豚づくりを行い、銘柄豚「伊賀豚」のブランド化を行われた。その頃大手ハムメーカーが1本1万円のハムを売り出しており、相場で値段が決まる豚肉販売では生き残れないと加工で付加価値をつけた良いハムをつくる事業を立ち上げられた。当初は事務所のログハウス、ハム工場が2つでスタートされた。

しかし、いいハムをつくっても宣伝がうまくいかず、全然売れなかった。そこで、生協などへ工場見学を開催し、ハムづくりを側でみる交流会を開催したが、時間が持たないので体験をしようと話していた。ある幼稚園からウインナーづくり体験をさせてという要望があり、やってみたところ、「できた!」と歓喜の声で体験教室がヒット。その後は、ハムが売れるようになり、直売所をつくったり、弁当持参だったお客様からの要望でパーベキューをはじめたり、「パンフレットができたら送って、買うから」というお客様の要望に応じて通販が始まった。

店舗や百貨店でも商品が売れ出したがもっと直売に力を入れたいと平成7年8億円を借りて国が推進していた農業公園をつくられた。

この時各地の牧場などを視察し、観光に主力をおいているところは一過性のものだと、地場に根付いたしっかりとしたものづくりをすることをテーマとされた。

#### 季節ごとに変わる体験メニュー

ファーム内の各体験や商品メニューは季節ごとに変わる。私たちが訪れた時は、公園内の5つのポイントをまわってスタンプ集める「秋の自然探検ラリー～五感体感ラリー～」が行われていて、5つの「聞く」「さわる」「におい」「見る」「味覚」ゾーンがあり、例えば「味覚ゾーン」では、楽しい道具で野菜の正体当てをした後にスタンプを押すという仕掛けになっている。

また、手づくり体験教室では、通年開催の「ウインナー教室(ウインナーの味はガーリックやパセリなど時期によって数種類)」「石釜で焼くジャージーミルクパン教室」の他に「いちご摘みからはじまるいちご大福教室」など9種類開催されているようだ。

私も実際に手づくりウインナー教室を体験した。肉と脂身と氷を混ぜて、味付けをし、ピストルの

ような道具に腸をセットし、肉を押し入れていく。肉が詰まったら、半分にした長いウィンナーを指で押さえウィンナーの形に区切り、結ぶ。初めてのウィンナーづくりは、肉の固まりがみるみるとウィンナーとなる驚きと、数人で作業をするのでわいわいととても楽しい体験だった。私たちの他にも小さな子どもを連れた親子づれや福祉施設の団体、友人同士できた若い女の子たちが参加していて会場はいっぱいだった。平日は主に学校行事や会社の旅行で利用、休日はファミリーや友人同士などが訪れるそうだ。

体験教室の部屋は、肉の部位やソーセージの種類など、食の説明に使用されるかわいい教材がたくさんあった。

モクモクからの提案～エコライフを体感する宿泊

その日はドーム型のコテージ「OKAERIビレッジ」に泊まった。2005年滞在型食農学習施設としてつくられた、白と木目を基調としたとてもおしゃれな気持ちのよいコテージであった。

宿泊施設までは傾斜角度10度の100mの坂があるのだが、そこまで歩くと消費カロリー約6カロリーで、体重と身長により約 g マイナスになりますよという表示があり、歩こうと意欲がわく仕掛けになっている。フロントで受付すると、エコライフカードと万歩計を渡される。エコライフカードには「ゴミの分別をした」、「8000歩歩いた」、「歯ブラシをもってきた」などの項目があり自分でチェックし、全部できたら記念に写真をとろうとなっている。

部屋には、ぐるぐる回して発電するエコ懐中電灯や、施設内の風車がつくる風力発電が流れるコンセントの下に小さなかごがおりてあり、携帯電話を充電できるようになっている。

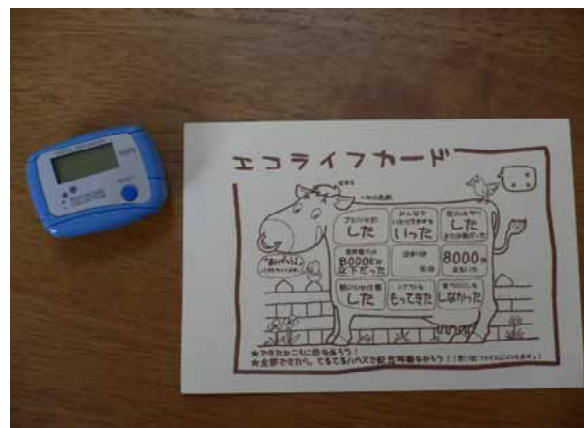
さらに「おかえりコイン」という木のコインがあり、持参した歯ブラシを使ったり、朝食の食器を自分で返却すると1コインがもらえ「おかえりボックス」に入れると1枚につき15円がNPO法人三重スローライフ協会の活動に寄付される仕組みになっている。

宿泊施設内のゴミ捨て場は、楽しく分別できるように木の人形がゴミ箱を抱えており、捨て終わった後は滑り台でおいてくるという楽しい工夫がされている。楽しくかわいいので記念写真スポットになっているそうだ。

翌朝は、希望者は朝のひと仕事ということで、ジャージー牧場でのおさやりや乳搾りを体験し、



ビール工場の浄化施設の横を通ると施設の説明があった



受付で渡されるエコライフカードと万歩計



乳搾りを待つジャージー牛

モクモクの体験メニューは、子どもも親も楽しめる内容ぞろい朝食となった。酪農の体験でも朝食でも、モクモクのこだわりなのか、そのスタッフの方からジャージー牛や朝食の食材について説明があった。

「あー楽しかった」話さずにはいられない

改めてモクモクのパンフレットをみると「食と農業のあり方を見つめ直していただく食農学習の場」とある。

2日間を通して、しっかりとしたものづくりと意志のもと展開されている取り組みに、私はここまで見せてくれるのか、教えてくれるのかと目から鱗がぼろぼろと落ちる感じであった。また、お

いしいものが食べたいという人からもっと学びたいという人まで興味の度合いによって、人それぞれが楽しめる場になっていると感じた。

おいしい、楽しい。自分の目でみて安心納得。またうちで食べたい。誰かに伝えたい。写真をたくさん撮らせていただき、こんな興奮のもとに家路につき、家族、友人、知人にしゃべりまくりました。

(あいこう みほ)

### 失われる地域文化の、 保存・継承を考える その3

八女丸林本家保存・活用への取り組み  
原 啓介

地域文化が生き残るケースと、途絶えてしまうケース、その両者には、どのような違いがあり、保存・活用していくためにはどのような課題があるのか、事例を研究している。今回は八女市にある「丸林本家」について、「八女福島丸林本家保存機構（以下、保存機構）」の北島力さんにお話を伺った。

八女市福島地区は、古い建物や歴史的に価値の高い建物が建ち並ぶ地区で、国から「重要伝統的建造物群保存地区」にも指定されている。

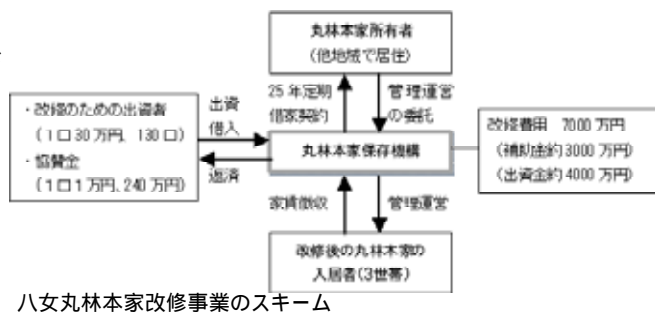
八女福島地区にある丸林本家は明治時代の建物で、南棟、中棟、北棟の3軒の建物からなる。丸林本家の所有者は市外に住んでおり、平成9年頃から空き家になっていたが、市民有志による「保存機構」が所有者より管理委託を受け、平成18年度「伝統的建造物群保存修理事業」の補助を受けるとともに資金募集等に取り組み、修理を行った。

保存機構メンバーが中心となって補修費用を調達

このケースは、丸林本家の所有者との管理委託契約の締結という全国でも珍しい取り組みを行っているので紹介したい。

まず、2006年4月に、建物が老朽化し、朽ちそうだった丸林本家を何とか再生したいと、任意団体の丸林本家保存機構がつけられた。補修費の見積もりをしてもらったところ、自己資金が7000万円必要ということだった。

NPO法人であれば、銀行から2000万円程の借金ができるのだが、任意団体なので、銀行からの貸し付けを受けることもできない。また、重要文化財になると、行政からの補助が8割得られるが、この建物は未指定であった。結局、八女市から約



八女丸林本家改修事業のスキーム



八女丸林本家は、3軒の建物からなる町家です。3,000万円の補助を受けたが、残り4,000万円を集めなければならない状況になった。

そこで、補修費用を捻出するために、保存機構が中心となって、市民や友人・知人などに一口30万円の借入金を呼びかけ、なんとか10人から130口の出資を集めたようだ。

そうして、2007年、無事補修が完了し、現在、町家カフェ・木工ギャラリー兼住宅・専用住宅として活用中である。

所有者とは定期借家契約を結び、保存機構は丸林本家の管理運営を行っており、毎月の家賃収入を年に1度出資者に分配している。所有者は補修費を全く負担していない代わりに、家賃収入を得ることはない。また、建物は非課税であるが、土地は課税対象となっており、税金は所有者が負担しており、建物を管理している保存機構への管理料の支払いはない。

#### 景観・建造物の保全の特異な例

丸林本家の補修から活用に至るまでのプロセスは、任意団体が、オーナーから管理委託契約するという、非常に珍しいケースである。

伝統的建造物群保存地区内にある建物だとしても、4,000万円という補修費を集めるのは並大抵のことではない。モチベーションは、景観と建物を守りたいという思い。建物のオーナーでなくても、地区の景観や建物を守りたいという強い思い入れのある人がいれば、何らかのアクションが動



きだし、周囲の人の共感を得ながら活動が広がっていくという好例だと思う。(はら けいすけ)

## どうする大牟田

地域コミュニティの再生  
TOMネット大牟田フォーラム報告  
山辺 眞一

どうする大牟田 ~地域コミュニティの再生~  
TOMネット大牟田フォーラム報告

平成19年度のTOMネットのフォーラムを大牟田市で開催しました。11月26日の夕方、商工会議所の大ホールに地元の人たち約40名の参加のもと、TOMネット会員とのディスカッションが今回の目的です。

毎年、中心市街地の活性化に向けたフォーラムを開催していますが、今年はTOMネットからの活性化提案をベースとして議論をしようという試みで、講演会のようなスタイルではなく、スピーカーが口の字型に座り、その後ろを参加者が囲むという、「朝までスタイル」で行いました。

実際には、朝まで議論したわけではなく、3時間のフォーラムでしたが、スピーカーが同じ目線で話をするというのは、ワークショップ形式に近く、近いところから発言をする感覚が好評でした。

地域コミュニティの再生に向けて

最初に、TOMネット林代表理事から、「三丁目の夕日」、続編がヒットしている理由を紐解きながら、中心市街地に求められているのは、昔はどこにでもあった地域のコミュニティを再生することである、という熱い思いが紹介されました。事例紹介は時間がなくなり、最近元気の良いマカオやパースの視察報告、国内の事例がいくつか紹介されましたが、今回のフォーラムのテーマ「地域コミュニティの再生」に対する大牟田への提案の導入部分としては、効果があったようです。集まっていた参加者は、地元を何とかしたいという人たちであり、人が減り、店が減り、子どもの声が聞こえなくなったまちなかの再生をなんとかしたいと頑張っている人が多く、林代表の話を聞きながら聞いていました。

基本は「つなぐ」こと

次は、TOMネット九州会から、「どうする大牟田~地域コミュニティの再生」をテーマとした提案のプレゼンです。最初に小生が、「大牟田の



会場内の様子

いま」と題して、これまでの様々な計画や中心市街地の状況を概略説明しました。もちろんこれまで言われてきたこと、おさえておくべき点は、事前に把握していなと、「あいつらは勉強していない」と地元から不満が出るだけでなく、提案そのものに意味がなくなります。さらに今回は、今までは見かけなかった視点を加えて紹介しました。フォーラム後の交流会で、あの指標は見たことが無かったと言われたのは、まちなかの徒歩圏内に多くの病院・医療機関が存在しているということです。

安心・安全なまちなかの機能としては分かりやすい機能ですが、意外と見落としがちな指標なのかもしれません。

次に、まちなかのコミュニティ再生のための提案として、まちなかを構成する拠点間の連携を大型店を含めた回遊空間によって実現すること、そして内外の人々が集まりたい思える場づくり、あるいは半ば強制的に集まる場となる大学等のサテライトキャンパスなど、たまり場とそこへのアクセス空間の整備を基軸とした提案、まちなかを東西に横断する大牟田川の再生と同時に回遊できる水路空間の整備の提案などを行いました。具体的なこれらのイメージを、TOMネット九州会の大隈前九州会長の説明によって提案しました。

若い人の感性を生かす

大牟田市には(国)有明高等専門学校が立地しています。たまたま、今年度の学校実習として「まちなかウォッチング」が行われていたと聞き、男女2名の学生さんにゲストスピーカーとして、参加してもらいました。

大牟田のまちなかの評価と今回の提案に対する感想では、知らない場所が多かったことや寂しい雰囲気、おもしろそうな路地裏など、かれらの年

代でしか気付かない点が紹介され、大学等の学生さんと連携する重要性を改めて確認しました。

地元の期待は大きい

今回は、ある縁を機会にTOMネットから地元へ提案をした訳ですが、今後のまちづくりへの支援もお願いしたいという地元からの要請もありました。もともとTOMネットの活動理念には、民間企業のネットワークを生かしたまちづくりの支援、社会貢献が含まれています。まちづくり気運を高め、TOMネットのネットワーク、さらに会員のネットワークと知恵が生かされることによって、地元の期待に少しでも役に立てればと思います。「こうしよう大牟田」の第一幕の準備開始です。(山辺 眞一)

## 近況

3年後に迫った九州新幹線全線開通に思う

昨年から鹿児島の仕事の関係で、九州新幹線「つばめ」に乗る機会が増えた。九州新幹線といっても博多から八代まで通常の特急電車で行って、八代から新幹線に乗り換える。時間的には、これまでより1時間半程度短縮され、博多から鹿児島中央駅まで2時間20分で、鹿児島は完全に日帰り圏となった感がある。

さらに九州新幹線は3年後の全線開通を目指し、急ピッチで工事が進められている。全線開通すると博多～鹿児島間は1時間半と大幅に短縮される。

学生時代に7時間ぐらいかけて鹿児島に行っていた時代に比べると隔世の感がある。しかし、この新幹線、ご多分にもれず八代から鹿児島までの区間はトンネルばかりで、ほとんど外の景色を楽しめる区間は少ない。確かにビジネスとして移動する場合には、便利でありがたいことであるが、「ゆっくり」旅行を楽しみたいといったニーズからは、ほど遠い。

この「ゆっくり」旅行で、人気のあるのが肥薩線の一部(人吉～吉松間:48.5km)に「いさぶろう号(開設当時の通信大臣山縣井三郎をから命名)」「しんべい号(開設当時の鉄道院総裁 後藤新平から命名)」という観光列車である。この路線は、スイッチバックやループがあるなど鉄道としても楽しめる。景勝地では、わざわざ写真を撮りやすいように停止するなど、時間をかけて走っているとのこと。(この観光列車の記事は、「よ

かネット83号」に掲載)

私は、あいにく乗車していないが、今度、是非乗車したいものと思っている。

鹿児島情報をもうひとつ報告する。天文館に有名な「こむらさき」というラーメン店がある。スープが鶏ガラと鰹出汁も入っているようなあっさり味で、麺は細麺、ラーメンというよりも「汁そば」といった感じのラーメンで、私の好きなラーメンのひとつである。

久しぶりに昼時に行くと、なんとガソリン高騰の影響なのか、一杯900円になっていた。もともと800円と高いラーメンだったのであるが、100円値上げしてもお店は満杯状態。

これは私の勝手な解釈であるが、鹿児島県人は、北海道と同じで、どうもラーメンは外食でも「ご馳走」のランクに入っているのではないかと思う。とにかく福岡に比べて高いラーメン店が多いようだ。福岡の「小腹を満たす」ために食するラーメンといった感覚とまったく違うように思う。

(山田 龍雄)

今年も正直に

一昨年ぐらいから、地域の農や食に関する仕事に関わる機会が多くなりました。ここ数年、新聞・マスコミで「食の安全」に対する警告、国民的な関心を高めるような事件がいくつも報道されています。新聞の社会面には毎日のように企業によるお詫びの広告が掲載されています。これらの不正・ミスのお詫びを頻繁に公表するようになったのは最近ですが、この数年間のことでは無いはずです。

これまでは、黙っていれば分からない、わざわざ公表しなくても良いという意識だったのが、告発や密告された時の打撃が大きいから早めにと意識へ変わってきたことは間違い無いと思いますが、もっと根は深いところにあるような気がしてなりません。「今回さうまくやれば」という姿勢は、「選挙さえ勝てれば」という気分によく似ているような気がしてなりません。

観光の仕事の中でも、最近、コンプライアンス(法令遵守)がよく言われています。一つの施設、店の不正によって、その地域のブランドが傷つき、立地企業だけでなく、住民の誇りまで、その影響は「風評被害」として地域にとっては計り知れない影響を受けることもあります。

食品の元になる農産物でも、0157のカイワレ大根説、関東のダイオキシン問題、東海放射能漏れの

納豆問題等、様々なことが過去にも起きています。

やや暗い話ばかり書きましたが、巷に、ネットに、テレビにと、情報は溢れていますが、何が正しくて、何が間違っているのか、情報を受ける側は、逆にその情報が正しいのか、どう判断するかのために、他の情報を取りに行くこともできるようになりました。

今年も、現地の確かな情報を正直にお伝えしていきたいと思います。 (山辺 眞一)

ネットテレビに出演中：木曜午後3時

「どこでもテレビ博多」(docodemotv.jp)の  
“人もうけ列伝”

ネットテレビで毎週放送しています。覗いてくれた友人から「久しぶりに糸乗節を聞いたよ」とか「糸乗漫談面白かったよ」とか、メールや電話で知らせてくれています。

「人もうけ」が私のビジネス戦略(大げさな?)と言うことで番組名になっているのですが、その戦略の元になっている“オチコボレ意識”こそが私のアイデンティティです。本当の意味での番組名は「オチコボレでも人もうけはできる」、なのです。ところがテレビ系の人間は、字数の多いことをいやがります。

そもそも私は、ネットテレビというシステムを在来のテレビやメディアとは違うものだと思っています。強いて言えば、「動画放送の地域共同ブログ広場」みたいなものだと思っています。それぞれの地域ごとにネットテレビをつくって、「九州共同ブログ広場」ができるといいと思います。今新聞が壊れかかっています。若い人は読んでいません。新聞のチラシも消えていくでしょう。その後の地域ミニコミ媒体がこの「ネットテレビ」だと思っています。

ところで、私自身は、高校時代にルールを外れて、ルールに乗らない人生を歩いてきたのですが、編集屋、土建屋の後で、友人の計らいで都市計画屋・地域づくり屋の世界に迷い込み、自分がオチコボレであることをじっくりと味わいました。これは大変幸運なことでした。

それは、「人もうけができたならメシは食える」、「誠実で、ウソくさいことやハツタリを言わなければ、人もうけはできる」、さらに「オチコボレはリスクに強い(失うものがない)のでチャレンジしやすい」、「チャレンジしてリスクを冒し、一生懸命工夫をしていれば、仕事は回ってくる」ということが分かったことです。それを、若い人



どこでもテレビHPにて、過去の放送も見ることができます

たちに伝えたいのです。

ここでオチコボレの定義をしておきましょう。念のために言えば(私は気にしないのですが)、オチコボレだからといって品格が低いということではない。世間の評価が低いということだけです。この評価が低いと言うことが、極めて有利な条件につながります。

オチコボレはリスクに強い

世間の評価が低いので、百点の仕事ができなくても(少し不十分な点があっても) ダメージになりにくい

オチコボレは、ある程度の品質があれば、努力している限り評価される

評価が低いと不満を持ちにくいので、いい気分で仕事ができる

従って、効率が悪い仕事、人の嫌がるどんな仕事でも受ける気になる

難しい仕事に当たりやすいので、勉強になる

オチコボレは、誰にでも教えてもらいに行きやすいし、教えてくれる人も多い

教えてもらった仕事の成果は、差し支えない範囲で教えてくれた人にフィードバックしておく問題は、ルールに乗っていないので「不安」が大きいことだが、これも考えようで、「えり好みせず一生懸命仕事をする事」につながる

結局、オチコボレは「人もうけ」もしやすい

ポイントは、ルールを外れたからには仕方がないので、オチコボレという状態を利点にして生きる決意をすることです。オチコボレとしての自覚を持つことです。「オチコボレであることをじっくりと味わった」と書きましたが、自覚のない段階はまだオチコボレとは言えない。まだルールの端っこにでもしがみつこうという気分が残っているので、チャレンジャーにならず、単なる「不満

屋」になりやすい。オチコボレの気概は、「不安があるのに不満は持つな」です。こんなことを、私の孫（世代）に伝えたいという気分でしゃべっています。

11月から番組が始まって2ヶ月たったところです。2008年の1月3日には2ヶ月分のまとめを話すつもりです。ちょっとのぞいてみて下さい。

ネットテレビ；docodemotv.jp木曜午後3時

時間外は「インターネット博物館」でアクセスして下さい。

第3回 放送内容の組み立て(11/15)  
 第4回 ㈱人生の墓標づくりセンター企画内容(11/22)  
 第5回 少子化は地域問題(11/29)  
 第6回 “友達”とはどういう意味か(12/6,12/13)  
 第7回 オチコボレの行き方はストレスがなく、ラクで仕事も楽しい(12/27, 1/3)  
 放送への感想などは ito@docodemotv.jp  
 系乗へ直接の通信は  
 メール：itonori@mue.biglobe.ne.jp  
 HP：http://jinen-t.com/

(系乗 貞喜)

糸島の焼きガキを眺めながら

寒い季節になると、糸島で一際にぎわうのが焼きガキ屋さんです。漁港周辺を車で通ると、ビニールハウスにいっぱいあった人間をみることができます。友人が遊びにくるとよく連れていったりするのですが、本当に焼きガキだけしか売ってなくて、ビールやおにぎりを持参しないとイケなかったりします。もっとサービス増やせば儲かるのになぁと常々思っていました。

そんな折、商工会の青年部でお祭りに焼きガキ店舗を出すことになり、牡蛎についたフジツボなどはがす作業を手伝うことに。朝10時の開店に間に合わせるために、6時から港近くの漁師さんの庭先を借りて作業です。凹凸が回転する機械をカキに当て、余計なものを削いでいきます。フジツボが服に飛び散っては、かなりの異臭を放ちます。せっかく削いでも中身がなかったり、死んでいたりして1割ぐらいいは商品になりません。殻付きの重さで販売するので、できるだけ削ってあげたいと思うのですが、量も増やさないとイケません。3人がかりの3時間作業でおよそ160キロできました。店舗では、量り売りも行っているのですが、一日でなくなってしまう量です。夕方には、スタッフで手伝ってくれていた九大生たちが、次の日

の仕込み作業要員としてスカウトされていました。

家族経営で毎日カキを準備しないとイケない様子を実際に見ていると、とても他のサービスまで手が回らないというのが実感です。実際に牡蛎のフジツボなどはがす作業は、パートのおばちゃんたちが手伝っていました。お客の目線では、地元にはおいしい塩や地鶏のおにぎりがあるので、一緒に売ったら儲かりそうなんて簡単に考えてしまいますが、人手やコストの面から、実際にはハードルが高いことがわかります。相手の手の届きそうな範囲での提案はなかなか難しいものです。人手紹介まで含めた現実的なプランを考えねばと、店舗で接客しながら思った次第です。

(本田 正明)

地元の人による地元の人のお祭り

佐世保きらきらチャリティ大パーティー

12/5(水)佐世保市四ヶ町商店街の総延長1km 横幅11mの日本一長いアーケードで乾杯するパーティーに行ってきました。

10月ある研修会で、佐世保市四ヶ町商店街協同組合理事長竹本慶三さんのお話聞く機会がありました。パリで1万人が集まるパーティーがあることにヒントを得て、今年で12回目になる5500人で乾杯するパーティーを開催されていること。商店街は場所とテーブル、乾杯用のビールなどを用意し、参加者は一人千円のパーティー券を購入し参加する持ち寄りパーティーであること。また、同時期に商店街中心部の公園を中心にしたイルミネーションは、きらきら応援団として、市民に「1口1000円で2個の光がつきます」と応援してもらう仕組みをつくられていることを伺い、商店街で持ち込みパーティーとはどんな感じなのか、楽しそうなので行ってきました。

商店街には開始前の18時頃着いたのですが、すでに緑と赤のテーブルクロスがひかれ、「婦



3時間かけてフジツボを落とす様子

人会様」など団体の名前が書いてある机が先まで並べられていました。鍋やコンロなど持つ人や、オードブルの宅配屋さんが行き交い始めていましたが、既にパーティーが始まっている団体もありました。外で多少寒いのでお弁当の他に、鍋（おでんが多いらしい）や七輪で焼き鳥を焼いている所もありました。

誰でも参加できるとのことで、テーブルは団体予約用と当日参加・個人用があります。参加費は団体は一人1000円、個人は2000円です。どちらもビールなどの飲み物とパーティーハットが付き、個人の場合は1200円分の屋台の飲食チケットがついています。

パーティー参加者の目印は三角帽子のパーティーハット。スーツ姿の職場の仲間をはじめ、商店街各店のお客さん、外国人のグループ、子どもづれのグループ、個人で参加した人と皆かぶっていて、パーティー気分が盛り上がります。

19時の開始後は中央部分に設けられたやぐらから、理事長の竹本さんや市長のお話があった後、一斉に乾杯をし、風船をとばしました。イルミネーション期間中限定で公園に出店されている佐世保バーガーやカキ焼きの屋台があります。個人で参加した私たちも熱々のバーガーを買いビールやホットワインとともに楽しみました。私たちの隣には、毛糸の帽子の上にパーティーハットをかぶったおばあちゃんが3人、イルミネーションをみながら仲良く佐世保バーガーを食べていました。

買い物客など普段通り通行する人もいますので、通路には目安の青いテープが引かれています。商店街の中央に警察署があり、見回りをされていること、団体参加者には事前説明会を開催するなど安全面にも配慮されているようです。

皆さん思い思いに楽しんでいるのですが、1年の終わりにまちの一角で、大勢の人が集まってきて過ごしているという雰囲気が高く、楽しい時間を過ごした小旅行でした。（愛甲 美帆）

## 第2回飯山市シンポジウム

- 観光地を磨くセンスアップの技術革新 -

このシンポジウムは、立教大学アミューズメントリサーチセンター（RARC）が主催し、「観光地を磨くセンスアップの技術革新」をテーマとして、長野県飯山市なべくら高原の「森の家」において開催された。

目的は、各地の観光地の技術革新の事例、また観光資源の「リユース」「有効活用」の事例につ

いての情報交換・共有であり、今回が昨年12月に引き続き2回目となる。

これら2回のシンポジウムで出された観光地における技術革新の事例をデジタルアーカイブとして蓄積・整理し、今後の観光地研究・計画にあたって活用するためのデータベースを構築している。

このシンポジウムは、当社がお手伝いしている佐賀市観光推進協議会の会長である立教大学観光学部村上和夫教授からお誘い頂いた。少人数で、知り合いのネットワークによって人を集めて議論する形式だそうで、参加者は37名で、立教大学観光学部をはじめとする大学の研究者の方々や、旅館、旅行会社等の事業者、メディア、行政、コンサルタントなど、観光に携わる様々な立場の方が来られていた。

当日は、まず「戦後の観光地に於ける革新事例」というテーマで鼎談が行われたあと、「まち」「農村」「温泉」という3つのテーマに分かれてのワークショップが開催された。

余談ではあるが、会場の森の家は長野県の最北端、鍋倉山麓にあり、周辺は前日まで大雪で50～60cmほどつもっているという状況であった。

戦後の観光地に於ける革新事例の読み解きについて

まず、第一部として、長野大学三田先生、城西国際大学溝尾先生、財団法人日本交通公社梅川氏のお三方から、戦後の観光地における革新事例についての読み解きがあり、その後第二部として、「まち」「農村」「温泉」の3グループに分かれ、全国各地の観光地の革新事例についての報告・意見交換が行われた。

第一部の鼎談の中で、「シンクタンク・コンサルタントが、世の中の変化のスピードに合わせて提案内容を革新していくのは大変なこと。事例はたくさんあるので、これらを参考にしながら、地域の人々の前向きな姿勢を連携し、後押ししていくことが必要」というお話があった。これを聞いて、まず第一歩として他地域の動きの何が革新的なのかを判断できる視点を養い、技術を革新していくということの必要性を改めて感じた。それと同時に、地域に深く根ざすことで地域の諸問題に対して様々な角度からの解決案を提示でき、地元の人とのネットワーク・結びつきを深め、共に動いて問題を解決することができる必要があると、必要であるとの思いを

強くした。

各地の革新事例についての意見交換

第二部のワークショップでは、「まち」のグループに入り、平成18年度に作成し、現在進行中である「佐賀市観光振興戦略プラン」の事例についての発表を行った。私の発表の概要は、

- ・委員会形式（委員長：立教大学観光学部村上和夫教授）でプランを作成したが、委員は観光客の送り手である福岡の女性・メディアと、受け手である佐賀の事業者、公共交通関係者、旅行会社などをお願いし、発地と受け地の両方の視点からつくったプランであること。
- ・情報発信、商品開発・ルートづくり、もてなしの3部会に分かれてテーマ別に具体的な議論を行い、18年度内に3つの取り組みを実行に移したこと。
- ・プラン策定に関わった人々が計画から実行まで関わるといふプロセスにより、佐賀城下ひなまつりという一大イベントでの提案事業の実証実験、佐賀市民のふだんの生活を楽しんでもらう商品の展開など、できるだけお金をかけずとにかく実行に移していく活動が今後も各所で展開されていくこと。

といったことであったが、ワークショップ参加者の方々からは、「外部から移住してきた人が、地域の何がすごいかを地元の人に説き、地域のモチベーションを上げていることがポイント」「今後10年、20年と継続するための組織づくり、人材の発掘がカギ」「観光客の送り手となる福岡都市圏の女性を委員に入れていることが興味深い」などといった意見をいただいた。佐賀市の方とも、今後の継続体制が現在の最大の議論ポイントの一つであり、プランを永く継続していくための体制づくりのヒントをいただいた。

今回のように様々な意味で「見晴らしの良い場所」に出掛けることはとても大事な経験であり、ネットワークも広がる。この他に雪山を歩く森林セラピーも体験することができ、実りある一日であった。（原 啓介）

今年もホークス応援のために頑張ります

去年も私が応援している野球のソフトバンクホークスは、残念ながらパリーグ3位という結果でした。

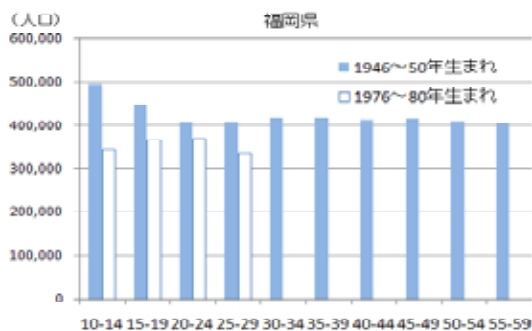
3月～10月が野球シーズンですが、それ以外の時期も、1月の選手の後援会のパーティーに始まり、春季キャンプ、シーズン後も秋季練習、秋

季キャンプ、球団開催のイベント、民間企業企画のトークショーもあり、忙しいんです。

私は去年1年間で、ホークスに関する事に、約20万円使いました。液晶テレビが買えます。

今年もたくさんホークスを応援できるように、仕事も頑張りたいと思います。（佐伯 明日香）

表紙説明



最近、友人が東京から戻ってきたり、また地元に戻ってきたいという声を何度か聞いたので、「ひょっとしたら昔に比べて“同世代の若者”は地元志向が高まっているのではないか」と思いましたが、データを見ると、まだまだ九州からの人口の流出は止まらないようです。

福岡県の人口定着を見ても、20～24歳までは人口が増加しますが、その後は県外に就職するためか、減少に転じていました。

このデータを調べている最中、僕の回りでも来年東京に行くという友人が現れました。

どちらも親しい友人なので、少し寂しい気もするのですが、僕は福岡で頑張るつもりなので、来年以降も盃を空けて彼らの帰りを歓迎する役回りをしていきたいと思います。（は）

よかネット No.89 2008.1

(編集・発行)

株式会社よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号  
福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

http://www.yokanet.com

mail: info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

株式会社地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6942-5732

東京事務所 TEL 042-501-2531

名古屋事務所 TEL 052-202-1411

株式会社地域計画・名古屋